

# ナチズムの精神構造

— ドイツ精神史への一視角 —

多田真鋤

- 一. ナチズム研究の諸傾向
- 二. 自由理念のドイツ的特性
- 三. ローマン主義・保守主義・有機体思想
- 四. 反合理主義思想と人種理論
- 五. ワイマール時代における右派
- 六. ナチス「指導者国家」論

## 一、ナチズム研究の諸傾向

ナチズムの精神構造「ドイツ精神史への一視角」と題した本稿は、別の表現をすれば、ドイツ精神史に内在する思惟様式 (Denkweise) の諸傾向が、二〇世紀の国民社会主義ドイツ労働者党、すなわちナチス政党的世界観、その精神構造を深く規定している諸要因であると考えてさしつかえないと言うことでもある。従来、ナチズムに関する主な研究手法、ナチズムの思想把握については次のようなものがある。その一は、イタリアのファシズム、ドイツのナチズムの発現した一九二〇年代から三〇年代にかけて、ドイツの歴史学者F・マイネッケ、イタリアの歴史学者B・クローチェらの古典的自由主義者の全体主義把握の姿勢である。すなわち、一九世紀以来、崇高なモラルに立脚し、政治を指導してきたヨーロッパの精神が、一過性の病弊に冒された現象である、と観る立場である。

これらの見解はいわばファシズムの古典的解釈といえよう。晩年のマイネッケが一九四九年に公刊した「Die deutsche Katastrophe (ドイツの破局)」において、「第三帝国の初期にあれば多くの人々を心酔させた果てしない幻想から、末期の同じく果てしない失望と崩壊にいかにして移行したか、また移行せねばならなかったかを、誰が今日われわれに完全に説明しえようか。ドイツの歴史は、解き難い謎と、不幸な方向転換に富んでいる」と、ナチズムを体験したドイツの歴史家は、ドイツ史に内在する宿命的な悲劇を慨嘆している。

またマイネッケと同時代を体験したイタリアのB・クローチェは、ファシズム体制の初期にはファシズムの思想と行動に好意的であった。ムッソリーニの「ローマ進軍(一九二三年)」の前夜のできごとについて、ファシズム研究家のP・ヴィタ、フィンツィ (P. Vita-Finzi) は次のようなことを述べている。

「ナポリのサン・カルロ劇場においてファシストの主催する集会が開かれたが、これに参加したクローチェは演説

をぶつファシストに盛んに拍手を送った。一緒に来ていてこのクローチェの振舞いに驚いて真意をたずねた友人に、クローチェは答えたという。『しかし、君は知っているかね、暴力は歴史の助産婦であるということ』と。』

しかし、クローチェは死去する二年前の一九五〇年に「全く不明の致すところではあるが、私はファシズムとは一部の若々しく愛国的な分子を結集した戦後一時期の単なる一過性的現象にすぎぬものと考えていた。それはやがて何ら害をおよぼさずに消え失せてゆくであろうし、それどころか、むしろ好ましい結果を残していつてくれるであろうとさえ、考えていた。」と述懐したのであった。マイネッケ、クローチェのファシズム解釈は、ヨーロッパのモラルの病弊は、いずれは快方に向かうであろうとのリベリストの典型的なファシズム観であり、あの当時の多くのリベラルな知識人たちの政治観を代表するものであったと言っても過言ではない。

第二は、マルクス主義の立場に立つ解釈である。マルクス主義の視点からファシズム、ナチズムを把握する見解は、古典的にはパーム・ダットの「ファシズムと社会革命」(R. Palme Dutt, *Fascism and Social Revolution*, 1934)とか、デイミトロフの著名な規定 (Georgii Demitrov, *Selected Speeches and Articles*, 1951) などがあり、現代のこの立場からの研究者としてはアメリカのノイマン、ハルガルテン等があげられる。ファシズム、ナチズムは、資本主義社会の産物であり、反プロレタリア的反動体制であるとの見解である。デイミトロフの「権力を掌握したファシズムは、金融資本の最も反動的な、最も好戦的な、最も帝国主義的な公然たるテロリズム独裁である」という断定は、マルクス主義からみたファシズム観の典型例である。

このデイミトロフの規定は、現代もなおマルキシストのファシズム観として通用している。しかし、独占資本主義段階における金融資本の反動要因とファシズムを同一視し、ブルジョア・デモクラシーの前衛としてファシズムを位置づけようとするマルクス主義的見解は、あまりにも公式論的であり、抽象的、硬直的であって、ファシズム、ナチ

ズムの本質を把握するには不適當であると私は考えるものである。

第三は、ファシズム、ナチズムと共產主義との一体性的解釈である。大戦後のアメリカ政治学界では全体主義の概念のうちに、共產主義を含めようとする傾向があらわれてきた。

すなわち、トータルタリアニズム (Totalitarianism) という術語によつて、ファシズム、ナチズム、共產主義、日本の軍国主義、中国の人民民主主義、カストロ体制、マッカーシズム等々、反個人主義的政治イデオロギー一般を統括してしまうのである。

すなわち、ファシズムと共產主義の共通性または同一性を証明し、これと自由民主主義との対抗関係を強調するのである。このトータルタリアニズム論は、米ソのいわゆる冷戦期においてとくに唱えられ、政治的意図が色濃くうかがえるものである。この全体主義論の中心的な学者であつたH・アーレントは、その著「全体主義の起源」(The Origin of Totalitarianism) のなかで、「全体主義運動の指導者たちは、イデオロギーをおそろしくまともにうけとり、ヒトラーは彼の氷のように冷たい論証の能力を、またスターリンは彼の弁証法の無慈悲さを誇りとし、イデオロギー上の含みを論理的に極限の徹底性にまで押し進め、傍観者からすると、途方もなく原始的で荒唐無稽なものにまでしたのである」と述べている。アーレントにおいてはまさにナチズムとロシア・共產主義は同一線上においてとり扱われているのである。さらにまた、C・フリードリッヒは、「ファシズムと共產主義は、全体主義的独裁がその本質的特徴において同一である」とし、その共通点を六つに要約している。すなわち、(一) 首尾一貫したイデオロギー、(二) 単一の大衆政党の存在、(三) 物理的、心理的テロリズムの体系、(四) 政府と党によるマス・メディアの独占、(五) 武力闘争のために必要な武器の独占、(六) 全経済の集中管理と指導 であるとする。

その他の解釈としては、P・ヴィーレック、W・シャイラーなどの「いくつかの国の歴史展開の必然不可避の帰結

としてのファシズム体制」、オーガンスキー、カウツキーなどの「近代化論」のファシズム把握などがある。

以上のように、従来「全体主義研究」の多様性が存在するが、私はこれらの研究によって、ファシズム、とくにナチズムの本質は解明できないとの所信に立っている。かれこれ四〇年余のドイツ政治思想史の研究に携わってきたが、ナチズムは、ヨーロッパのモラルの一過性的病態でもなく、独占資本主義段階における反プロレタリア的反動でもなく、またアメリカのアーレントやフリードリッヒの主張するような共産主義との一体性の現象でもないとは私は考えている。ナチズムは、近代ドイツ精神史に深く根をおろした思想として把握すべきであると考えている。以下の諸項目において、近代ドイツの精神構造に深く関与した思惟様式、「ドイツ的思考」(Deutsche Denkweise)とナチズムとの関りを指摘してみようと思う。

## 二. 自由理念のドイツ的特性

近代ドイツにおける自由の理念は、イギリス、フランスにおけるそれとは相違するものと言わざるをえない。自由理念のドイツ的形成には三つの源泉が指摘しえよう。その一は、一八世紀後半に始まるドイツ観念論哲学の形成過程においてであり、「自由」を絶対的、形而上学的認識の対象として把握する、カント、フィヒテ、フンボルトによって法治主義のもとに自由理念は位置づけられる。

ヘーゲルは一七八九年のフランス革命を青年期において評価したものの、漸次その国家至上主義の哲学によって個人的自由を国家有機体に従属せしめた。第二の形成は、いわゆるナポレオンのドイツ支配(Fremdherrschaft)に対する自由解放の戦いの過程において、自由主義のイデオロギーは形成されてくる。

その三は、一八七一年ドイツ統一に続く産業化、工業化時代における市民層の自己主張のうちにあらわれてくる。

すなわち、農奴解放、ギルド制廃止、地方自治、自由貿易論の抬頭が市民層の主要な関心事となり、リベラリズムの諸様相が次第に表面化してくる。

しかし、これらの諸傾向も、イギリスやフランスの西欧諸国における、国家権力に対抗する市民イデオロギーとしての自由主義とは質を異にする「ドイツ的思考」に基づいた特殊な性格であった。J・H・ハロウエルはその著「イデオロギーとして自由主義の没落」(The Decline of Liberalism as an Ideology. 1946)において、ドイツ自由主義の特殊性が、ナチズム形成に間接的に寄与したと称する。すなわち、「二〇世紀のドイツの知識階級の自由主義的信念が不安定であり、思想として深く根をおろしていなかったのである。この観点から次の疑念が生じる。すなわち、一般に言われているように自由主義は殺害されたのではなく、自滅したのではないかということである。ドイツ自由主義の死滅とその具体的表現としてのデモクラシー諸制度の破滅とは、ヒトラーと民族社会主義者の奸策によるものというよりは、むしろ自由主義自体のもたらした結果ではないかという疑惑である」といい、また「自由主義はナチズムによって破壊されたのではなく、ナチスはむしろ自滅した思想体系の正当な継承者であった。自由主義が自滅しなかったならば、ナチスは決して権力を把握しえなかったであろう。」と断言している。それでは、他の諸国と相違するドイツの自由理念の特殊性とはいかなる性格のものであるか、著名な二人の思想家の見解を述べてみよう。一八七一年ドイツ統一を完成し、ドイツ帝国を築いたビスマルクと親交の篤かった歴史学者のH・トライチュケは、イギリスのJ・S・ミルやE・ラブラーの「自由論」に対して駁論を試み、自らの「自由論」において次のように述べている。すなわち、「政治的自由とは、制限された自由(Politisch Beschränkte Freiheit)なのであり、国家からの、あるいはまた、国家権力に対抗するような個人の自由ではなく、国家における自由、すなわち個々人が自由になるための努力は、同時に国民全体の利益を必然的に生じ、個人の自由は国家権力のための唯一最大の基礎であるような自由、

共同体形成のための自由」であるとドイツ的自由の特性を強調している。<sup>(1)</sup>

また文化哲学者として著名なE・トレルチは、一九一六年 第一次世界大戦の最中に、「自由のドイツ的理念」という題名のもとに、各国ともそれぞれの伝統的思惟形式や、風土的制約、歴史的発展の相違から、「自由の理念」もさまざまな形態をとってあらわれてくるといい、ドイツにおける自由の理念とは、「国家意思の形成に関して、形成的共同作用である限りにおいて存在するのであり、ドイツ国民にとっては、個人意思の総計から支配意思を出現させる(ルソー)のでもなく、また政治に携るものを、委任者によってコントロール(ロック)するのでもなく、歴史、国家および民族によってすでに厳存している共同体への自由な意識と義務感に基づく帰依であり、献身において存在する」ものであると説いている。<sup>(2)</sup> トライチュケ、トレルチの二人の思想家の「自由のドイツ的理念」は、一九世紀ドイツ精神史の展開過程から生成してきた「ドイツ的思考」そのものであり、ナチズムの精神構造を形成する一要素であると考えられてよいと思う。

#### 註

- (1) H. Treitschke, Die Freiheit in historische und politische Aufsätze. 1867
- (2) E. Troeltsch, Die deutsche Idee von Freiheit, in Deutscher Geist und Westeuropa. 1925

### 三. ローマン主義・保守主義・有機体思想

次にナチズムの精神構造を構成する重要なファクターとしてローマン主義とドイツ保守主義をとりあげてみよう。いわゆる「ドイツ的思考」の特質が、ナチズム形成の主要なファクターであり、その思考様式の中核をなすものがド

イツ・ローマン主義なのである。

この「ドイツ的思考」について、K・マンハイムは次のように指摘している。すなわち、

「自由解放戦争とそれに継続する王政復古 (Restauration) の時代は、ドイツ的思考の特性にとって決定的なものであった。ドイツ的思考は一九世紀以来ローマン主義的であり、歴史主義的であり、それはこの国に生れた固有の反対ですら、なおそれから脱し切れないほどにまで根深いものである。H・ハイネはローマン派の敵対者であるにもかかわらずローマン主義的であり、K・マルクスは歴史学派の敵対者であるにもかかわらず歴史主義的である」と述べている。<sup>(1)</sup>

ドイツ・ローマン主義は、啓蒙的合理主義に対する強力な敵対者として、一九世紀初頭に登場してくる。ヘルダーや若いゲーテによってその端緒がひらかれ、シュレーゲル、ティーク、ノヴァーリスやその他の思想家の著作によって明らかな思想運動の形態をとって精神界に登場してきたのである。彼らは深く直接に体験し、与えられた情況の意味を全体として感得し、感情を移入することによって把握することに意義を見出したのである。

それ故、合理主義者の思惟する人為的で実在しないような概念に関してはローマン主義者は懐疑的であり、合理主義的で機械論的世界観は、ローマン主義者にとっては異質な世界観である。ノヴァーリスはローマン主義的感覚を次のように表現している。すなわち彼は、

「自然から、土壌から、人間の魂から詩歌をとり去ることに、またあるいは、神聖な人々のあらゆる足跡を破壊し、すべての偉人の業績に皮肉をあびせ、世界から変化に富んだ色彩を奪うのに絶えず従事してきた合理主義者たち」ときめつけ、「数理的な忠実さのために『光』は彼らの気に入りの主題となった。

彼らはそれが色彩を生み出すという理由よりも、むしろそれが分析され得るという理由で、『光』を楽しんだ。そ

こで彼らは、彼らの何よりも大切な仕事に因んで啓蒙 (Enlightenment) と名づけた」と述べている。<sup>(2)</sup>

ローマン主義の国家学者アダム・ミュラーは、次のようにいう。「われわれに教示してきたかつての政治家たちは、教科書や統計表から、すなわち研究というような面倒な思索から教示してきたのではなく、彼らの人生体験がその基礎をなしていた。政治現象の研究は法律や政治制度に対して直接に経験することであり、分析的方法や思考を拒絶しなければならぬ」という。ミュラーはまた次のようにもいう。「フランス革命の根本的な間違いは、個人が現実的に社会の結合から解放されて、彼らにとって好ましくないものを外部から覆し、破壊しようと考え、彼らが当面するあらゆる諸制度を不必要なものと断定してしまう幻覚のうちに存在するのではなからうか。簡単に言えば、国家の外部に誰かが存在することが可能で、その外側から国家に新しい方途を示すことが可能で、古くて不完全ではあるが十分に信頼しうる政治体制の代りに、少なくとも次の二週間は完全であるような新政治体制が現実存在しうる<sup>(3)</sup>と考えるような幻覚なのである」という。ミュラーや彼に続くドイツ・ローマン主義者たちは、人間の理性や計画によってではなく、神の意思が歴史展開の背後にあるとみなしたのであって、人間は神や絶対者の意思を妨げようと試みるよりも、むしろこの意思によって導かれるべきであると考えたのである。またローマン主義思想は、一八世紀に一般に広まっていった合理主義的社会契約論における原子論的個人観に反対し、「個性」 (Persönlichkeit) の意義を重視した。個性とは、独自性とその生来の天分を発展させることに意義を有する人間像の名称として使用された。すなわち、量的扱いを忌避し、その独自の質を強調するものである。ローマン主義はこの個性の発展と自己実現に価値をおくと同時に、国家社会 (共同体) にも同様に高い価値を附与したのである。ミュラーはさらに次のようにいう。

すなわち、「国家は単なる工場、農園、企業体のような利益社会などではなく、それはすべての精神的文化を把握

し、莫大なエネルギー、無限の活動力、そして有機的生命全体におけるすべての外面的、内面的国民生活を内包する親密な共同体である」といい、「すべての有機体が無限の多数の有機体を含むと同様に国家 (Statskörper) もまた無限に多数の分岐から形成されている」とし、各有機体では「全体は部分を、部分は全体を保証する」関係を保つものとする。ミューラーはとくに個人の「人格の共同体への献身と犠牲」を要求し、国家を「生と死に結ばれた全体」の位置に高めてゆく。その際、個人は全体に直接に結合するのではなく、具体的には個人と国家との間には、家族、等族、自治体、市町村などが介在し、それらの種類を異にした小生活圏を媒体として個人は国家共同体に位置づけられるものと考えるのである。このようにして国家は、すべての生活圏の交差点であり媒体として認識せられ、また現存する各世代のみならず、後続する各世代の結合ともなる。

そしてこの結合は空間的に無限に緊密になるのみならず、時間的に不滅である、という思考に達する。この国家の恒久性の論理は、事象を過去、現在、未来を通じて流動の課程において把握しようとする動態的要求によって支えられているからである。

次にミューラーの保守思想から影響を受けた一九世紀後半のポール・ド・ラガルド (Paul de Lagarde 1827-1891) の保守主義について少々論述しておこう。かつてナチス・ドイツの理念形成に参画し、「二〇世紀の神話」の著者として著名なアルフレート・ローゼンベルクは、その著作「理念の形成」において、ニーチェ、ワグナー、チェンバレンらとともに、ゲッチンゲン大学の東洋学教授であったラガルドをナチズムの真の思想的先駆者として称賛し、また自らの思想形成にも多大な影響をうけたと謝意を述べている。

ラガルドの思想活動はほぼ一八五〇年代のプロイセンの政治状況を背景に開始されている。すなわち、当時のプロイセンにおけるユンカー支配の統治構造に対して批判を実施している。彼は一八五三年に自らを急進的保守主義者

(Radical Conservatism) と命名し、前世代のローマン主義や保守主義を整序しながらローマン的保守主義の在り方を鮮明に表明しようと試みた。彼は反体制の急進的保守主義者として自らの存在を明瞭にし、一八五四年には「大ドイツ中欧帝国」の構想のもとに、領邦国家の多元的ドイツの統合を意図している。ビスマルクのドイツ帝国の発展とともに、それに伴うもろもろの社会的矛盾や政治的混乱、精神文化の後退などを憂慮しながらその独特の時代批判を展開するのである。

ラガルドの著作「ドイツ論集」(Deutsche Schriften 1886)における一貫した中核思想は、近代合理主義批判の思想である。彼が極力批判し、排斥したのは合理主義思考の特徴である対象を分析によって理解する方法的態度であった。すなわち、彼の思考方法は合理主義とは正反対の「全体像の把握」に重点がおかれていた。彼は対象の本質に接近するために「本能」の必要性を説くのである。ミューラーと同様に彼も有機体的国家観を重視し次のようにいう。「有機体は人為的産物ではなく、メカニズムのように部分を集めて組成することもできない。真に有機的な制度は、過去からの発展の所産であるばかりではなく、生き続けている過去と密接な関係を保っていなければならない。樹木はその幹や根を失って生きることができないし、動物はその骨格を離れて生きることができない。」彼は、有機体の現実の姿を自然発生的、歴史的所産である「国家共同体」に認めようとする。

一八七一年、ビスマルクによるドイツ統一が成就した当時、機械文明と物質至上主義の思潮は、伝統的精神文化をいちじるしく後退させ、質を重んずる個性は、量的平等の原理のもとに没落の徴候をみせはじめたのである。ラガルドは、一般普通選挙、政治的デマゴギー、大衆迎合のプロパガンダ、世紀末の大衆娯楽など、次第に上昇してきた社会諸現象を極力否定し、忌避したのであった。

ラガルドがしばしば用いた「独創力」と「真実性」の言葉は、当時の機械論的文明状況に疎外感を抱いていた青年

たちの理想的用語となっていた。一九世紀末から二〇世紀初めのドイツ青年たちの間には、一種の虚無感や疎外感が漲っていた。「この感情から脱却するには、相互協調の精神、神との一体感への憧れ、共同体的連帯感の必要性を認め、個性を確保しながら、共同体への結合をいかにすかに腐心していたのであった。ドイツの青年運動は、ラガルドの近代合理主義批判の哲学にその指針を見出し、彼のローマン主義的有機体論や、その独自の民族宗教観にそれぞれの指導精神を発見したのであった」<sup>(4)</sup>との表現は、ラガルドの役割を正しく認識したものであったといえよう。

#### 註

- (1) Karl Mannheim, *Der konservative Denken*, 1926.
- (2) Novalis, *Die Christenheit oder Europa*, in *Sämtliche Werke*, Band III.
- (3) Adam Müller, *Die Elemente der Staatskunst*, 1922 Band I.
- (4) R. Braun, *Individualismus und Gemeinschaft in der deutschen Jugendbewegung*, 1929.

#### 四、反合理主義の思想と人種理論

二〇世紀のナチズムの形成に強く機能した非合理主義 (Irrationalism) の思考方法は、一九世紀後半のビスマルク体制に批判を投げかけたJ・ラングベーン、人種理論のゴビノー、チェンバレンなどによってドイツ精神史にあらわれてくることになる。<sup>(1)</sup>ラングベーン (Julius Langbehn) は、一八九〇年頃からドイツの社会的、精神的状況に批判を投げかけ、ドイツの民衆に警告を発しはじめた。その主著「教育者としてのレンブラント」 (Rembrandt als Erzieher, 1891) を公刊し、「ドイツ民族の精神生活が次第に衰退の状況を明らかに示しはじめた」といい、独特の論理を展開する。彼の論旨は極めて単純である。

「ドイツ民族は理性と知識にのみとらえられているから、これを克服させることが重要である。ドイツには独自の哲学もなく芸術もない。大学は存在していても、そこを支配しているのは自然科学のみである。自然科学的思考は人々の間に拡大し浸透しはじめているが、はたしてそれが真実の文化といえるか。ドイツには感情の文化、芸術の文化が喪失してしまった」といい、また「プロイセンはドイツ統一をなしえたが、しかしその軍事的、官僚的精神と平板な合理主義とによって、ドイツに精神的革命を喚起することをなしえなかった」と断定する。彼によれば、ドイツ人をこのような精神的虚脱状態から救出する最良の方法は、オランダの画家レンブランドの生涯とその生き方を探求することであると考えた。レンブランドの「情熱、直観、活力等」はドイツ人の模範とすべき特質であった。彼は「直観」という用語をしばしば用いたが、この用語はドイツの非合理主義発展のために大きく機能したのである。「われわれの祖国の精神的再生には政治的新生が先行しなければならない。」と説く彼の著作は、当時のドイツ人に異常な感動を与え、発刊後三年間において四〇版を加え、三五年間で六〇版を記録したのであった。ラングベーンの思想がドイツ国民に熱狂的に迎えられてからほどなく、二人の特異な思想家がアーリアン人種の文化的優秀性を誇張するべくあらわれてくる。

すなわち、ゴビノー (Arthur de Gobineau) とチェンバレン (H. S. Chamberlain) であり、両者ともその特異な人種理論を掲げて当時の思想界に迎えられた。ドイツがその帝国主義的進展を示そうとした時期は、ヨーロッパを始めとして各地域は先進国の軍事的分割がすでに完了していた。再分割が平和裡に達成されない場合は、軍事力と金権力の莫大な支出を必要とした。それには巨大な労苦を国民の前で正当化できるようなイデオロギーが必要となってくる。アーリアン人種の優越性を申し立てることがこの機能を果たしたのである。

一九世紀末葉のドイツでは、人種の科学的論議は必要ではなく、人種理論は一種の世界史の哲学となり、世界観と

化していった。

ゴビノーは、フランスにおいて一八五五年頃「諸人種の相違について」という論説を公刊し、それが一九〇〇年頃ドイツ語に翻訳されて、ドイツでゴビノー崇拜の風潮が醸成されてきた。彼は人種の階層制を展開し、そのなかでニグロを最下層の段階を、白色人種は唯一文明階層を代表し、とくにアーリアン・ゲルマン人種がすべての頂点に立っていることを説く。ヨーロッパの近代文明は、ゲルマン民族と古典古代民族との協働によって創造されたのであり、現代の文明利器のすべてはゲルマン民族の祖先によって創造され、その使用法において優れていたと称する。

ゴビノーの人種理論は、フランスやイギリスでは全く同調者はいなかったが、ドイツでは有名なワグナー (Richard Wagner) をはじめ、多くの共鳴者が続出した。ワグナーやその女婿のチェンバレンによって人種理論は人種の帝国主義と反ユダヤ主義のための強力な武器と化してゆくのである。

チェンバレンは、ゴビノーの人種理論をさらに徹底し、反ユダヤ主義の思想を極端化していった。彼の主著「一九世紀の基礎」は、ローマン主義、神秘主義で貫かれ、客観的記述を度外視した直観的推理に充ちたものであったが、当時のドイツ国内では広く喧伝されていた。彼の著作において、ゲルマン民族は国家の創設においても、新しい思想や技術の発見においても、人類の運命を真に形成する人々から構成されており、今日の精神文化と技術的機械文明の成果は、ドイツ民族の創造によるものであると主張したのである。

ドイツ国民はチェンバレンのこの著作において、ゲルマン民族の優秀性を確認し、チェンバレンを全ドイツ主義の精神的建設のための最新設計者として容認したのである。フィヒテとヘーゲルは「全ドイツ主義」の精神的建設のために哲学的形式を与え、トライチュケはそれに歴史的品格を与え、さらにチェンバレンはそれに人種的形式を附加した。当時のドイツ皇帝ウィルヘルム二世は「ゲルマン・ドイツ民族の栄光がこの著書によって初めてドイツに顕示さ

れた」と賞讃し、陸軍の将校たちに彼の著書を配布した。ドイツ社会のすべての階層、すなわち、王族、貴族、ブルジョアジー、一般大衆にいたるまで、チェンバレンの人種理論は浸透してゆき、その六〇歳の誕生日には「カント、ヘーゲル以来の最も重要な思想家」として迎えられたのである。

ラングベーン、ゴビンノー、チェンバレンによって開始された非合理主義、神秘主義、直観的思考の流れは、第一次大戦直後においてシュペングラー (Oswald Spengler) によって拡大されていった。彼の政治論の主著は「ドイツ精神と社会主義」(Preussentum und Sozialismus. 1919) であるが、彼の政治思想の中核をなす主張は「指導者論」である。また彼の社会主義論は、ヒトラーの国民社会主義論と程度の差においてのみ異っているだけである。

彼は政治の本質について次のように断言する。「統治し、決断し、教導し命令することは一つの技術 (Kunst) であり、難しい技術であって、他のすべての技術と同様に生来の天稟を前提とする」といい、「政治は制度などによって左右されるのではなく人格 (Persönlichkeit) に左右されるものである。それゆえに、すべての個々の企業と同様に、国家経済の全組織においても、究極にはただ人格の信用しかない」のであるという。さらに続けて、「私は二〇世紀の歩みにおいて、ますます国家と憲法が、規約や条件が重要性を失い、権力を確立し精神の戦いに勝利をしめるような偉大な個人名が、決定的に重要となるような歴史の到来を予見する」といつているが、このような予見こそヒトラーとナチズムの出発への準備段階であり、それを醗酵させるに十分な酵母菌であったといえよう。

#### 註

- (1) ゴビンノー、チェンバレンに関しては、Peter Viereck, *Metapolitics: The Roots of the Nazi Mind*, 1961 および Jean Neurohr, *Der Mythos vom Dritten Reich: Zur Geistesgeschichte des Nationalsozialismus*, 1957. 参照

## 五. ワイマール時代における右派

一九一九年以後、ヒトラー政権の確立した三三年までのワイマール共和国時代 この共和国への批判を敢行した右派の動向は、ヒトラー運動とその政権獲得へ多大な助力を直接、間接に与えたのである。ドイツ研究で著名なハンス・コーン (Hans Kohn) はこの状況について次のように指摘している。すなわち、

「ほとんどのドイツ国民、とくに右派の論客はワイマール共和国を臨時の国家であるとみなし、実際にそれを国家と称することを拒否していた。彼らにとっては、国家という言葉は、『誇り』であり、『権力』であり、『権威』を意味するからである。ドイツ人は共和政体を単なる組織、しかも西欧の腐敗した制度にすぎないと軽侮していた。デモクラシーはドイツ精神に適応しない西欧からの輸入品であった。」<sup>(1)</sup>と云っている。ワイマール・デモクラシーは、当初から精神的にすぐれて反民主主義的風土における一時しのぎの存在として軽侮されていたといえよう。

一九三一年の「ドイツ主義大学連盟の政治教育報告書」には、当時代のワイマール体制に批判的な右派の政治思想家の代表的人物として、シュターペル、シュパン、H・ゲルバー、M・H・ベーム、M・ヴント、メラー・ファン・デン・ブルック等の名が挙げられているが、そのうち数名の思想家の所説をみてみよう。まずオートマル・シュパン (Othmar Spann) は、その「真正国家論」(Der Wahre Staat) の著述において次のようにいう。

「ドイツ民族は敗戦以来、困難と苦悩、さらに汚辱さえも耐え忍んできた。今日の課題は、この汚辱をそそぎ、膿腫、すなわち、デモクラシーとマルキシズムを切除することである。……国家に精神性を要求し、文化国家を切望するものはデモクラシーを忌避すべきである」という。シュパンにとってはデモクラシーは全体からの個人の解体、人間の原子化、社会の機械化を意味する。ドイツ的なものと西欧的なものとの対立は、全体主義と個人主義の対立

に縮少して考察される。

シュパンは時代思潮の転換を、西欧に発する個人主義の理念が死滅し、新しい思考方法―彼はそれを全体的 (Ganzheitlich) と称する―が生誕しつつあることを語る。シュパンの提示する立場は、相対主義を排して先験性を重視し、帰納的ではなく演繹的であり、経験的ではなく直観的である。その思考は反合理性で貫徹されており、啓蒙性ではなく内的本質を重視する。エルンスト・ユンガー (Ernst Junger) はその著「労働者論」(Der Arbeiter. 1932) において、自由を希求する新しい人間像 (労働者) を描きだしているが、彼はデモクラシーをすでに朽ちはてた状態にあるものとみる。一八世紀の社会契約の教義とそれから派生してきた市民的自由の理論によって、国家共同体への責任を伴った結束は、解約予告を基礎とした契約関係へと変容した。ユンガーは、この自由主義の社会契約的市民国家、すなわちデモクラシーの形態を採るワイマール共和国は、ドイツ国民にとっては外国産のものであり、異邦人の政治体制なのであるという。また、右派の有名な論客シュペンゲラーは、一九二四年公刊の論争的著作「ドイツ帝国の新建設」(Der Neubau des deutschen Reiches) において次のようにいう。

「財政的利害をめぐる不安によって、大公のビロードの椅子やワイマールの宴会でドイツ共和国は生誕した。それは決して国家形態というべきものではなく一つの商会である。

その議会では国民は問題とはならず、党派の利害が論ぜられ、権力と名誉ではなく、党派が語られ、将来への希望は論ぜられることなく、党派の利害のみが論ぜられている。

このような状態がドイツの議会主義なのである。大戦終結以来、いかなる行為、いかなる決意も思想もなく、かつて一つの態度さえもみられない」といい、彼はさらにクラウゼヴィツの「戦争とは他の手段を以てする政治の継続である」という有名な言葉を諷刺的に用いて、「政治とは他の手段を以てする私的事業の継続である」と言う。彼の政

治観はすこぶるアリストクラッティックなものであり、政治は輕蔑すべき大衆によつてではなく、エリートまたは指導者によつて行われるべき行為であるとの思想なのである。

メーラー・ファン・デン・ブルック (Moeller Van den Bruck) は、その「第三帝国論」において、自由主義は諸国民の道義的病弊であり、それは民族共同体を破壊し、文化を葬り、宗教を破滅し、祖国を滅亡してしまうものであるとする。彼はあらゆる政治指導を精神的指導者の意志に認めようとする。指導者たる人物は、大衆の世論から離れ、あたかも彼の意志が大衆の意志であり、大衆の意志が彼の意志であるかのように、そしてそれによつて彼は大衆に方向を指示すべく振舞うことが可能であるとする。民族共同体に基盤をもつ政治の概念は、あらゆる自由主義の要素が完全に消滅することによつて全体主義的に裁ち変えられることになる。そして一人の指導者が定着（指導者原理）することにより、国民は大衆社会とその無政府状況の危険性から脱却しようということになる。ゲルハルト・ギンター (Gerhard Günther) は、一九三二年に公刊した著述「生誕しつつある帝国」(Das werdende Reich) において次のようにいう。

すなわち、「民族とは、過去、現在、未来を通じて生存し続ける人々の統一体である。

それは各世代にわたつて展開される一つの全体性である。民族の意思は統計機や計算機によつて把握しうるものではない。民族の現実的意思は、ある種のアクラマチオンにおいて、積極的な政治指導において把握されうるものである。民主主義の本質は、民族が政治的全体として姿を現わしてくることによつて存在価値がある。民主主義は同質の者のもとにおいてのみ可能なのである。故に、独裁もまたそれがまさに私人の集合の意志ではなく、国家的必要とそれに伴う民族の意志に照応する場合には過渡的な必要として民主主義的でありうる」という。ワイマール共和国の政治制度として最も議論の対象となつたのは議会の性格であつた。カール・シュニット (Carl Schmitt) は、そ

の論説「議會主義の精神史的状态」において議會主義はあらゆる精神的基盤を欠いていると指摘する。

シュミットによれば、一九世紀の市民階級の政治意志表明の手段としての議會は、従来の基盤とその意義を喪失したのであり、それはまた一般投票による大衆民主主義の邪魔になり、時代錯誤の制度であつて、もはや政治意志形成の最高の機関としては無用の存在であるという。色褪せつつある古典的自由主義の産物とみなされる議會は、「一般意思」としての、すなわち、支配者と被支配者の一致としての民主主義に対立するとされる。

シュミットによれば、民主主義は本質的に大衆によつてあたえられる直接的な同意の形式、すなわち、アクラマチオン (Akklamation) として理解され、あらゆる古典的自由主義の内容がしりぞけられる。かくして、自由主義と民主主義の明白な分離、まさに民主主義と独裁との間の本質的一体性の主張があらわれてくるのである。以上のワイマール共和国体制を批判し、攻撃した右派の思想家の多くは、当時広く読まれていた雑誌タート (Die Tat) に依拠してその主張を展開していた。

これらの諸思想から抽象化された対立が生じ、国家の新らしい政治形態をめぐる政治文化論争を惹起せしめたのであつた。すなわち、単なる形式主義的立憲体制に対する民族意志の生きた表現、社会の機構化 (メカニズム) に対するエリート、または指導者の質、アモルフな大衆に対する階層的社会構造、無名の支配機構に対する一人の指導者の個人的責任、利己的、党派的利益に対する国民全体への奉仕、冷たい無感情な人間関係に対する内的、有機的交流する共同体形式、……このような精神的、思想的傾向は、政治的世界においては自由民主主義の理念に対抗する方向を示すようになる。デモクラシーの平等原理のうちに「質」を考慮しない量的原理を、その憲法体制のなかに単なる形式主義を、その権力行使のなかに支配の無名性と決断喪失の形態を見出すのである。ワイマール・デモクラシーは、ワイマール共和国という構造物から国家形成の要求をはげしく戦いとうとする数多の理念や、左右の世界観にとり

かこまれたなかで衰弱していったのであった。ワイマール時代の反民主主義思想は、共和国的形態を内部から空洞化すること(2)に本質的に貢献したのであったといえよう。

#### 註

(1) Hans Kohn, *The Mind of Germany*, 1961

(2) ワイマール時代における右派の動向に関しては、Kurt Sontheimer, *Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik: Die politischen Ideen des deutschen Nationalismus zwischen 1918 und 1933*, 1968. に詳細に記述されている。

### 六. ナチス「指導者国家」論

#### (一) 反近代主義としての全体主義

イタリアのファシズム、ドイツのナチズムはともに個より全体に重点をおく点において全体主義 (Totalitarianism) である。

しかし、イタリア・ファシズムとドイツ・ナチズムとの間には、その価値をおく「全体」観に相違がある。ファシズムは国家至上主義であり、これに対しナチズムは民族至上主義である。国家と民族の相違はあっても、「個」より国家とか民族とかの「全体」を重視し、価値をおくところに両者は全体主義なのである。そしてこの二つの政治イデオロギーに共通するのは、いわゆる「反近代主義」または「反合理主義」の思考様式である。

ナチズムは、西欧デモクラシー (自由民主主義) と、ソビエト・共産主義 (マルクス・レーニン主義) も、ともに近代合理主義的思考から派生してきたイデオロギーとして把え、この両者に対決の姿勢をとる。

すなわち、自由民主主義は古典的デモクラシー以来、「個人の独立性」「市民の自律性」にその基盤をおく。個の独立性、市民の自立性は、近代啓蒙的合理主義の理性的人間観から形成されてくるのであり、いわば原子論的個の存在を中心に社会契約思想によって形成されてきたのが自由民主主義の国家観なのである。これに対し、ナチズムは個々人は既存の国家共同体 (Nationale Gemeinde) とか、運命共同体 (Schicksal Gemeinschaft) の中において階層的に存在すべきものであり、共同体との一体的存在であるとみる。自由民主主義における社会契約思想に基づいて国家形成がなされてきたとの考えは、ナチズムにおいては否定されるべき思想なのである。

ソビエト・共産主義 (マルクス・レーニン主義) は、共産主義的未来社会の実現を目標とするイデオロギーであり、それは近代デモクラシーと同根の思想、すなわち近代合理主義に基盤をおいている。マルクス主義は唯物史観の歴史哲学を採り、経済発展段階説、資本主義体制の必然的崩壊を説く近代主義であるとナチズムは把握する。さて次にナチズムの採った「指導者国家」体制の成立過程について論述しておこう。

## (二) 指導者国家の成立過程

アドルフ・ヒトラーが、一九三四年八月ワイマル共和国の最後の大統領ヒンデンブルクの逝去後、大統領と首相を合体化する立法を実施し、みずから総統 (Führer und Reichskanzler) の地位について以後、彼はワイマル共和国に代えて指導者国家 (Führer-Staat) の名称を唱えた。しかし、この指導者国家に至る過程には、「全体国家」と「権威国家」という二段階の国家理論が展開されていたのである。全体国家という国家概念については、カール・シュミットがその著「憲法論」において次のように説明している。すなわち、「古典的な自由主義国家では、社会と国家は同一ではない。宗教、経済、教育、芸術等々の社会的諸領域はこの自由主義国家の外にある。

これらの諸領域に対して自由主義国家はなんらの干渉を試みない。いわばこれらの諸領域に対して、自由主義国家

は中立的である。しかし全体国家ではすべての社会的領域は国家領域のなかに包括される。すなわち、国家と社会との二元的存在はありえない。全体国家は社会生活の全領域を国家のうちに編入した国家、国家と社会の同一性に基づく国家なのである」とシュミットはいう。このシュミットの全体国家観に対して、一九三二年頃から次第に修正が試みられ、「権威国家」の国家理論があらわれてくる。ツイグラー (T. Ziegler) は、シュミットの全体国家の観念の多義性を整理し、権威国家の理論を展開する。すなわち、全体国家は国家の支配権の量的拡大を目標とするのであって、その支配権の権威や独立性は確立されていない、という。ツイグラーによれば、権威国家とは、独立した自己責任的な支配および権威の組織化された体制である。ナチス国家はこのような意味での権威国家であり、かつ国家支配の領域が社会生活のすべての領域におよぶという意味では全体国家である。このツイグラーの国家理論によって、シュミットにおいてはいまだ不明確であった「全体国家」と、一国一党支配的な政治体制との結合が成就された。

しかしながら、一九三三年にナチス政権が確立すると、いわゆる指導者国家の理念が一般化されてきた。その国家理論の代表的なものとして、カール・シュミットの「国家・運動・国民―政治的統一体の三重構造―」の著作が公刊された。シュミットによれば、ナチス国家の政治的統一体は、国家、運動、国民の三重構造的結合である。ここでいう国家とは、単に官僚制度などの機構をさす狭義の概念であり、政治的静態側面を指し、国民とは政治的決断や指導のもとに存在する非政治的側面を指し、運動が政治的動態的側面を担当する肝要な面なのである。運動の組織としてのナチス政党がその中心であり先端に位置づけられる。政治指導を担当するナチス政党は、国家機構、社会組織、社会的経済組織の全体を統括する。この三重構造のもとにおいては、地方自治行政、職能組合組織もナチス党の指導下におかれるのである。